

合わせ鏡としての書物と都市

——柳原孝敦『テキストとしての都市 メキシコDF』

福嶋 伸洋



柳原孝敦著

テキストとしての都市 メキシコDF (東京外語大学出版会 2019年11月)

いつからか、物語の舞台となった場所を訪れることを「聖地巡礼」と呼ぶようになった。そのような「聖地」を訪れるとき、わたしたちは、物語に描かれたものの痕跡を探し求める。少なくとも数百年、あるいは千年以上に涉って慣れ親しんできたはずの、虚構と現実の区別を忘れてしまったように。しかしたとえば、「ヘルシンキ (Helsingfors)」と余白に記された、ムーミンロールの先祖の家族写真を、『ムーミン谷の冬』の挿し絵に見つければ、物語の舞台がそのフィンランドの首都から遠くないどこかにあると空想するのは自然なことだし、書物自体が読者にそう想像するよう仕向けていると言って間違いはない。

本書もまずは、幾多の書物に描かれたメキシコDFへの(と同時に、この街を描いた幾多の書物への)聖地巡礼の記録であると言える。アルフォンソ・レイェスの『アナワクの眺め(一五一七)』、カルロス・フエンテスの『澄みわたる大地』、ロベルト・ボラーニョの『野生の探偵たち』といった書物を導き手に、著者のまなごしは、みずからの二十世紀末の記憶と、二十一世紀になってからの再訪の経験をもとに、メキシコDFという街を、もう一冊の——そして無限の——書物として繕き、読み解いてゆく。「都市を前にして、都市を歩きながら、人はただその表層を眺めるのではない。文献を通じ、想像力を通じ、他者の記憶を通じて、その街角の異なる相貌を幻視してもいるのだ」という一文は、本書のメキシコ市にだけでなく、あらゆる都市、あらゆる場所に当てはまるものだろう。

ここで「他者の記憶」として召喚されるものには、アメリカの人類学者オスカー・ルイスの著書があり、スペインの映画監督ルイス・ブニュエルの映像もあり、長年メキシコに暮らした日本のヴァイオリニストである黒沼ユリ子の回想があり、また、ラテンアメリカ文学者として著者の先輩に当たる野谷文昭や、後輩に当たる久野量一の文章がある。

言うまでもなく、わたしたちは、同じときに同じものを見ていても、同じことを感じたり受け取ったりすることはない。数々の書物や映像を通じてひとつの街をまなごすのは、時のなかで失われたもの、失われなかったものを見出すためであり、かつ、同じ街を異なるまなごしで見つめた他者になりきってみる、という真摯さの実践でもあるだろう。

『メキシコ征服記』によれば、当時テトチティランと呼ばれていた湖の上の都市(現在のメ

キシコ市)を目にしたエルナン・コルテスの一行は、「これはまさしくアマディスの本に語られている夢の世界のようだと言った」。

十六世紀にスペインで流行した、『アマディス・デ・ガウラ』のような騎士道物語を、ヨーロッパから大西洋を渡って新大陸に向かった征服者たちは、長い船旅のあいだの慰みとしたという。「識字率も低かった当時は、字を読める者が音読して他の者たちに聞かせていたのだ。それは格好の娯楽のひとつであり、みんなでわいわい言いながらひとつの物語を読めば、印象もそれだけ密に共有できる」。彼ら征服者たちは、「新大陸に騎士道物語の痕跡を確認していき、そこに由来するパタゴニア、カリフォルニア、アマソニアといった地名が付けられていった。

この意味では、メキシコを含む新大陸はそもそも、ヨーロッパ人の空想、想像力のなかに位置づけられていた空白を満たすために発見された、と言え過ぎかもしれないとしても、新大陸の発見は、「未知のもの発見」であると同時に、「既知のもの再発見」という性格も少なからず帯びていたはずだ。

たとえば、自分がたどり着いたカリブ海の島々がマルコ・ポーロの『東方見聞録』に描かれたインディアスだと終生信じたコロンブスも、書物のなかに生き続けたと言える。それらの島々が現在も「West Indies」と呼ばれ続けているという事実は、大航海時代の先陣を切ったこの船乗りたちの夢の痕跡でもあるのだろう。

メキシコが、征服者だったスペイン人と先住民との混血、そして彼らのおびただしい流血とによって成り立った国であることを、著者は、メキシコ市のさまざまな場所で確かめてゆく。中央広場ソカロの大統領官邸とカテドラルの近隣には、「征服された者たちの叫び声」がむき出しになっている場所、先住民の神殿の遺跡がある。さらに、その北にあるトラテコルロ広場にかつて建っていた別の神殿について、作家ホセ・バスコンセロスはこう書いている。「一五二一年八月十三日／クワウテモクによって勇敢にも守られてきた／トラテコルロは、エルナン・コルテスの手に落ちた／それは勝利でもなければ、敗北でもなかった／メスティソ国民の痛ましい誕生だったのだ／それが今日のメキシコである」。

コルテスの通訳として働き、征服に重要な役割を果たした先住民の女性マリンチェは、コルテスの愛人も兼ねていて、彼の子も産んだという。ノーベル賞詩人オクタビオ・パスは、一九五〇年のメキシコ論『孤独な迷宮』の一章で、メキシコ人を「マリンチェの子」と位置づけ、「子供が、自分を捨てて父を求めに行く母を許さぬのと同様、メキシコ国民はマリンチェの裏切りを許さない」と述べ、メキシコ人の根源に、取り除きたい苦痛が存在することを指摘している。それゆえ、公式にはメスティソ（混血）であることが誇りともされるメキシコで、人びとは現在でもみずからの存在を「チンガーダ（凌辱された女性）の息子」と、自虐めいて捉えることがあるという。

著者は、メキシコDFという都市（とそれを描いた書物）の行間に、征服者によって殺された先住民だけでなく、そのアステカの先住民が殺した先住民や、メキシコ五輪を間近に控えた一九六八年十月二日にトラテコルロ広場で反政府デモを行って消された人びとの存在が、亡霊のように浮かび上がってくるさまを、すでに声を持たない死者の声を聞くことを使命とする歴史家のように、探偵のように、跡付けてゆく。

数々の書物と、数々の場所——本書ではそれらが合わせ鏡のようにたがいを反映するが、イメージは無限に反復されるのではなく、反映されるたびに想像力の歪みを経て、少しずつ異なった姿を取る。わたしたちが本を手取るのは、そのような虚像とも実像ともつかない無数のイメージのなかから、何か、自分に必要かもしれないものを探し出すためなのだろう。この本を閉じたとき、ふとそんなことが思われた。

余話

本書で紹介されている下北沢にあるメキシコ料理店〈テピート〉に、評者（福嶋）は、著者（柳原先生）といっしょに行ったことがある。B&Bでロベルト・ボラーニョについてのトークイベントが開催された夜、登壇された柳原先生のお招きで、聴衆として行っていただけの私も、同店で開かれた打ち上げに連れて行っていただいた。

その際にも柳原先生は、〈テピート〉のかつての主が、アルパとレキント・ギターの名手チューチョ・デ・メヒコというミュージシャンだったことに言及されていた。しかし、そのチューチョが、ナット・キング・コールやハリー・ベラフォンテとも共演したという事実を、私は本書で初めて知った。作家ジャック・ケルアックが愛聴したジャズ歌手と、キング牧師の盟友で公民権運動を陰に陽に支えた俳優にして歌手——遠い歴史の登場人物としか思っていなかったふたりの微かな息吹を、下北沢のその一角で感じ取ることができると知っていたら、テキーラの味も少し違っていただかもしれないし、違わなかったかもしれない。